

# 水井戸の話

## 泉

村下敏夫

去る11月6日 日本地下水学会の秋季研究発表会が仙台で開催された翌日 学会長奥津春生氏の案内で青葉山の泉を見学した。うっそうと茂った木立に囲まれた沢頭にある泉は その昔海拔120mに近い仙台城の本丸で「御清水(おおず)」と呼ばれ利用されていた水源であったという。この泉は 青葉山の頂上部にのっている厚さ20m内外のれき層に浸透した雨水が湧き出したもので 落葉の香り高いあたり一面に 鈴のような音をたてて流れていた。またお城の中でもっとも重要な場所である二の丸には七つの手掘り井戸があって 常時1600人の大番士の用水にあてられていたという(図1)。

人の生活に欠かせない水を われわれ祖先はどのようにして得ていたのであろうか。井戸技術が発達していない大昔では 自然に湧き出る泉を井(いど)または走井(はしい)と呼んでいたようである。広辞苑(新村出編 岩波書店)によると 井は泉または流水を汲み取る所 走井は谷川などの流れが清く飲料水を汲むべき所 流井(ながれい)は水の湧き出て流れる井戸 となっている。上古の人たちは 洪水を避けて小高いところに住居をかまえ こんこんと湧き出る泉のほりに集落を形成していたのではなからうか。年中変ることなく清らかな水が流るように湧く泉は あるいは信仰のままと

なって 水神様として崇敬されてきたのであろう。われわれが水調査をするときには お宮 お寺にまず足を止めてみる。そこには 泉や由緒ある井戸があるからである。現在用いられている井戸(戸は添辞)は 用水を得るために地を掘って地下水を汲み上げ または汲みとるようにしたもの(新村出・前出)をさしている。井の語源は 泉であって 人工的に地下に穴を掘る技術が開発されてから 井戸の意味が変ってきたのではなからうか。

泉は 地方では「清水(しょうず)」といわれ「がま」と呼ばれて親しまれている。私の住んでいる昭島市にも いくつかの泉があって 集落形成の素因の一つになっていたように考えられる。東京の西に広がる武蔵野台地は 水が得にくいところで その昔旅人たちは「武蔵野の逃水」に迷わされて 旅行に苦勞したものであろうが ここに古くからある集落は 水の得やすい崖ぶちの所 山際の所に分布している。昭島市の中でも武蔵野の面影を残している福島 宮沢 大神 拜島などの集落は 泉や簡単な手掘りで地下水が得られる所である。市役所から少し南に下った諏訪神社の境内にある泉(写真1)は 古くから知られている名水で 宮沢の地名の起源といわれている。拜島には大昔から使用され どんな早ばつの時でも枯れたことがなかったと伝えられる「花井の井戸」がある。この井戸は 拜島三つの井戸の一つで 花井は拜島の上古の呼名である。正月2日3日の「だるま市」で近郷に著名な拜島の元三大師は 泉に囲まれた静かな環境の所にある。大師の境内にある「おねいの井戸」も拜島三つの井戸の一つで または「お鉢の井戸」とも呼ばれている。室町時代の末頃滝山城主 北条氏照の重臣石川土佐守が大日堂に娘おねいの眼病平癒を祈願し この井戸の水で目を洗って治ったと伝えられている。これらの井戸は 今では水も汚れて昔をしのぶ面影もないが かつては美しい泉で 人々



図-1 仙台城の井戸  
(奥津春生氏による)

1 宮沢の泉



